

多言語と学びの環境デザイン

« Espace langues » : planning et réalisation

倉館 健一

KURADATE Kenichi

Université des études internationales Kanda

kuradate-k@kanda.kuis.ac.jp

身につけたい外国語にどっぷり浸かれる学びの空間。学生の頃、そんな夢をみていた。街や大学、語学学校にもそのような場のないのが不満だった。キャンパスには留学生もいるだろうに、交流がないのが不思議だった。誰も聞いていないような語学の授業にも不満で仕方がなかった。そんな謎や不満を抱えながら教師になり、年月が経ち、なるほどこういう事情だったかと理解したことも少なくない。しかし同時に、どうやらこうした空間が実現できるらしいこともわかってきた。実際に縁あって、これまでSFCではマルチメディア・マルチリンガル・スペース (MMLS) に、慶應日吉キャンパスでは日吉コミュニケーション・ラウンジ (HCL) 及びプルリリンガル・ラウンジの立案から立ち上げに関わってきた。教え子にはこうした空間で活動を展開する団体を立ち上げたものも少なくない。また現在、神田外語大学では多言語コミュニケーションセンター(MULC)での活動に携わっている。

このような学びの空間は、コモンスペースとして発展を遂げてきた Web との親和性も高い。スマホ時代を迎え、デジタルなどと気負う必要はまったくなくなった。最高の学習材は辺りを見回せばいくらでも転がっている。なぜ今なお教科書や授業だけが発想の中心なのかと不思議である。一方向や一對一ばかりでなく、関係性を豊かに。そして学びを主体的に。単に教師次第だと思ふのだ。なにかが障害になっているとしたら、それを解消する手助けができればと思う。

1. 外国語教育とリソースセンターの歩み — テクノロジーとモードの変化

外国語教育のリソースセンター化は今に始まるものではない。戦前の事情は詳らかでないが、ここでは戦後の復興と教育の民主化事業の一環として国の補助金により施設が整備され、視聴覚教育の普及とともに開始されたものとしよう。慶應義塾大学語学視聴覚教育研究室を例にとると、1963年設立（戦中の校舎の迷彩塗装の除去はその5年前の1958年）。ここで謳われたのはラボ・資料・機材の管理、教材制作、語学視聴覚教育法の理論及び実際の研究、調査研究、発表、出版、講座設置など、語学教育に関連した事項の集中化である。その後、高度経済成長とともにテクノロジーは飛躍的に進歩し、ラジオからカセットオーディオ、テレビ、ビデオの登場など、外国語教育はこれらと密接な関係を保ちながら発展を遂げていく。

また時代は前後するが、1970年代にコミュニカティブ・アプローチが登場し、文法訳読法やオーディオリンガルメソッドに一定の批判が加えられていく。日本での受容には温度差はあったが、とりわけ90年代以降に大学でも徐々に普及が進ん

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

だ。この時期には高度情報通信網の整備や情報端末の普及により、LL から CALL へと設備を移行する動きも同時に加速した。大学大綱化(1991年)を端緒とした学部新設、新大学設立の相次いだ時期である。しかしながら、既存機関において組織レベルでの対応が広がりを見せるのは、世紀を跨ぎ、高等教育改革の影響がある程度かたちをなして来た時期を待つ。これはシラバスや成績等、教育情報のデジタル化の流れが確かになった情勢(「教育のシステム化」)、「一般教育」再編の進行、そしてなによりも、高度な英語運用能力養成への社会的要請の高まり、教育のグローバル化の要請、「学び」のモードの変化、多文化社会化への兆しなどを背景にしたものといえる(慶應義塾では2004年、前述の組織を外国語教育研究センターに再編)。

2. 大学図書館・ネットワーク化・多言語センター — メディアとリソース

このように外国語教育/学習材の集中化には、すでに半世紀に渉る歴史がある。ところで同じキャンパス内にはまた、大学図書館があった。ここでは多言語の学習材や資料がこれらのリソースと関連付けられることのないまま、一般に日本十進分類法(NDC)により整然と、しかし外国語学習の視点では極めて理不尽としか言いようのない状態で、さらにしばしば重複して所蔵されている状況がある。こうした大学図書館のレファレンスサービスの開始は戦後、アメリカ式をモデルに慶應とICUでスタート。東大を經由して日本の大学図書館に形式的に定着していった。しかし「教育そのものと図書館との関わりが非常に弱かった」(竹内)。ハーバード大学図書館を理想として、「授業のために必要な資料を指定書として図書館に置いて、学生に学習させるということを試み」るも、「授業そのもののスタイルが変わらない中で図書館だけを変えても、やはりうまくはいかない」。

この状況は90年代以降大きな転機を迎えることとなる。かつて図書館では目録化作業が中心的な業務であった(いわゆる「ランゲージセンター」にしても然り)。この問題がネットワーク化によって解決され、レファレンスの充実によりさらにサービスが向上してきた(安達)。同時に多言語処理は、ユニバーサル化の進展により、現時点で既にデータベース処理上の問題にはほぼ解決の見通しが立っており、いまやヒューマンレベルの問題を残すばかりと言ってよく、管理組織の専門化と職業能力向上、そして文化多様化の問題解決が問われる段階に移行している。

ところで、この活版印刷誕生以来の「情報爆発」の転機にあって、「新しい図書館のビジョンと、大学教育改革のビジョンがどこかで接点を持つような構図で、大学の新しいあり方を考えるべき」(吉見2011)であることは疑いがたい。個の知の力を強くするために大学があり、図書館があり、そして出版があるという「メディアとしての大学」という考え方がまさに信憑性を強める時代に入ったと言える。

その際に問われているのは、「教室とメディア」のつなぎ方の問題である。情報の「種」(=リソース)を拾い、もう一度教室に戻ってくるそのサイクルを大学でどうデザインするか。大学の将来構想は、学部や部局の壁があり、教育は教育、図書は図書という形に別れてしまいがちである。それぞれに自立性があり、大学全体のレベルで統合することは容易ではない。いずれも根は一つのはずだが、知を創造する基盤のあり方が、約500年ぶりに転回を遂げつつある事態である。このような移行期にあっては、教育と学びの変化を掘り下げ、関係するあらゆる立場を媒介してつないでいく存在が是非とも必要である。情報化時代、情報量があるのは大前提だ。

しかし、様々な情報をただ雑然と大量に集めるのではなく、上手に処理し、リソースとして教育や学びの現場で使えるようにできる仕組みづくりを施すのが、図書館・ランゲージセンター・教員の役割ではないだろうか。ちなみに千葉大の「普遍教育プログラム」での調査によれば、約 1000 クラスある科目群中、教科書をはっきり指定しているものは 35% ぐらいしかないそうである(安達)。「既存のパッケージはやはりもはや崩壊していると考えざるを得ない」。もはや教師ばかりでなく学習者自身もまた再編集し、さらには創造し共有していく「場」としての機能が、大学図書館やランゲージセンターには求められている。

3. 「場」のリソースと教育 — 教育のグローバル化・Web・コモンズ・協同

情報がオーバーフローする時代、かつての教養主義の伝統に則り、この本を読みなさいとか、あのコンテンツを使いなさいといった指示や教示だけでは有効性を欠く。そこには教師本来の役割があるとともに、学生同士が自発的に学ぶ環境も欠かせない。学習者同士のインタラクションを創出し、教師も教室だけではなく、多様な機会を設けて学習者の「視点を育成する」ことが必要である。多文化・多言語の学びの空間 «Espace Langues» はまさにそういった役割を最大限果たしうるポテンシャルを備えた「場」となるだろう。もちろんこうしたコモンズは図書館の機能として求められるものとは限らない。ラウンジカフェのような場があればそれもいいだろうし、講師室がそのように機能する場合もあるだろう(SFC の 3 棟は、各言語セクションの講師室を兼ねるが、(図らずも)このような形で実現している。白百合女子大学なども同様)。どこに置くかは教育機関ごとの選択の問題でしかない。

時に教育のグローバル化が取り込まれる昨今、留学生の存在は大きい。学びの「人的リソース」としての関与は当然であろう。また帰国生を含め、学生たちの言語プロフィールの多様化は進んでいる。多様に捉えるべき学生たちをひとつの「教室」に閉じ込め一斉授業を行なうスタイルでは、もはや「学び」のデザインを最適化することは困難な時代に入った。「<自分=日本人/フランス語母語話者>は<一様な><学生=日本人><集団>に<初習外国語=フランス語>を<授業時間>に<独り><教室>で<教える><語学><教師>である」といった職業意識だけでは、もはや教育は破綻するしかなく、また淘汰の道を辿るしかない。状況によって絶えず変化する関係性から動的に学びの起動を促す柔軟性はもとより、創造性を核とした教育実践力、情報を吟味する力を養う指導力、明確な市民意識、「学びの主体性」に委ねるべきもの/ないものを峻別しプログラム化していく専門性の構築、インフラ整備への貢献などがこの「場」に参画するカギとなるだろう。

またオンライン学習は、外国語教育/学習においてもすでに一般化しており、Moodle 等の LMS やソーシャルネットワークを利用した学習も急速に進んでいる。このような Web 上の学びの空間は、上記のコモンズと平行に発展を遂げてきており、ともに親和性が高い。英語は巷に溢れているが、その他の外国語の学習においてこそ、インターネットのもたらした恩恵は多大であり、最高の学習材になる情報、通信相手や交流の場などは、少し意志を持って辺りを見回せば見出しうる時代に入ったといえる。もはやパッケージ化した教科書や授業だけが発想の中心ではなく、今改めて、これらの発想の前提として学習者自身の学びの主体性が位置づけられるべきである。そこには教師の側の跳躍が必要である。

4. 教示なき学習の普遍性と有効性 — 学校文化批判とコンピテンシー

ところで、こうした一連のコモンズ成長の背景には、乖離を深めた大学と社会との対話メディアの必要性がある。保護者や学生たちから寄せられる、企業や社会が求める社会力形成の要請とのギャップ、学校文化への不満や先々の不安などにそれぞれが向き合う場でもある。これまで自明とされていた「教師-学生」の関係も変容が促されるとともに、教師の無謬性も過去のものとなった。多元的な価値を前提とする展望にあって「学び」に欠かせないのは、自分の将来を直接/間接に投射できる人たちの、身近に接する現実生きられた断片的な情報なのである。昨今取沙汰される「能力=コンピテンシー」とは、社会/学校での評価以前に、「学び」という、人間が生まれながらにしてもつ尊厳としての知性が平等なもの、つまり多様なものとしてあり、これを前提とする自己への信頼を源泉とした「知の解放」である。職業的都合から、この回路を開くどころか閉ざしてしまう構造が学校文化には根深い(レイヴ&ウェンガー、ランシエール)。一度「学校」を離れば、人から人への直接教示や言語を使った明瞭な教示はむしろ例外的だ。「教えるひとがいなければ効果的に知識を身につけることはできない」という現代の社会的共通認識は、「伝統的学習観」といえるものでしかない。実のところ、これは決して古くから社会に根付いたものではなく、現在の学校をモデルにして成り立っているものにすぎない。

もちろん、学術研究の場として、大学がその知識の伝達の機能を果たすことはその重要な存在意義である。また確かに確固たる自己と自己信頼を形成する上では、読書と産出の反復活動を伴う従来型の講義形態の方が適しているに違いない。しかしながら、あらゆる「知」が多元的、社会構成主義的に捉え直されていくなかで、教育の現場では関係性を豊かにし、創発を生む場をつくることが是非とも必要だ。価値の多様化する時代にあつて、自文化や情報メディアを相対化し吟味する能力が不可欠であり、絶対的な教師像ばかりでは学生の十全な自己形成を阻害する結果となってしまう(もちろん反面教師がいるのも悪くないだろうが)。一方向や一対一ばかりでなく、関係性を豊かに。そして学びを主体的に。個を強くするとともに、情況に応じて個を崩せる柔軟性。教育現場での社会性の変化はもはや不可逆である。

5. まとめ: « Espace Langues » — 複数言語の学習とコストと現実的展望

オーバーフローする情報化の時代にあつて、生涯学習やユビキタスという具合に教育もまた際限なく拡大している。もはや教育システムの破綻と終焉がまことしやかに語られる時代である。複数言語の学習もまた、「情報の過剰」や「コスト過多」として切り捨てられる運命だろうか。そもそも第二言語習得(SLA)の知見に照らし、大学課程の初習言語科目の総履修時間がこの諸条件を満たすにはほど遠いことは周知の事実である。ならば大学はもはやポピュリズムにおもね、英語帝国主義に染まりきるべきだろうか。ないしは一体どのような未来像に与すべきであろうか。

ところで« Espace Langues »の運営でまず直面する現実は、利用率の低迷である。以上の議論を通して明言するが、これはなんら驚くに値しない一過性の現象である。手当の仕方はいくらでもある。「メディアとしての大学」の再定義が進み、学びのモード変化に立ち会うこの時季、「授業」「教室」「キャンパス」、「教師」「学生」、「履修課程」「専攻」などといった諸概念がどれも未だ旧来のモードを脱しきれていない。我々教師は外国語にまつわる教育や学びの諸課題を掘り下げ、これらの「滞

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

り」を除いていき、学生たち自身にこそこの「場」を委ね、切り拓いていってもらわなければならない。展望はむしろ明るいはずだ。神田外語大学 MULC に携わる教師たちの思いはここに一致している。そして観察するのは以下のような変化である。学生たちが学び教え合えること、この場では学生たちが明るく輝いていること、「学力」と「能力」の違いがはっきりと窺えること、教師への直接の質問が劇的に減ったこと、学び方の学習への新たなアプローチが感じられること、など。

Espace Langues はスモールワールドであり、学生にとっては物理的な世界知のイメージとなる。すべての夢や希望や情報はここに凝縮されており、ここからすべてにつながっている。情報革命は現在、上述した知の解放を劇的に進展させている。多様性と変容の流れの中で、大学という場に位置する Espace Langues は、この「知の解放」の最先端を担っていると言っているだろう。この観点の意識化が問われている。しかしながら「複数性」とは、質・量・スピード・バランスともに途方もなくタフで、不確定な知的冒険である。その理念を明確にし、近未来を見定めた上で、今できることを今やるべきである。最後に、Espace Langues には、斯くのごとき希望への試みを押し進めるにあたり、この試みをより「開かれた」かたちで確認していく社会的使命がある。敢えてその事実を強調しておきたいと思う。

(なお本稿は、神田外語大学研究助成課題：『多文化・多言語教育/学習のためのマルチメディアデータベース構築研究』(2011-2013) の成果の一部である)

<参考文献・URL>

Kurokawa, I., Yoshida, T., Lewis, C. H., Igarashi, R., Kuradate, K.(2012), « The Plurilingual Lounge: Creating New Worldviews Through Social Interaction », *International Journal of Intercultural Relations*, International Academy for Intercultural Research.

倉館健一・濱野英巳(2008), 「外国語学習/教育のリソースとは」, 『外国語教育研究』, vol.28, 獨協大学.

倉館健一・五十嵐玲美・濱野英巳・岡野恵・三橋紫・Le Lardic, M.(2010), 「多様化する学生とその「学び」のあり方 - ことばの「学び」を育てるプロジェクト: 教師の「学び」のコミュニティ創出の試み」, *Rencontres*, vol.22, 関西フランス語教授法研究会.

倉館健一・五十嵐玲美・三橋紫(2011), 「教育の国際化と互恵的言語学習環境の創出」, *Revue japonaise de didactique du français*, vol.6, t.1, 日本フランス語教育学会.

慶應義塾史編集所編(1968), 『慶應義塾百年史・下巻』, 慶應義塾.

濱野英巳・岡野恵・倉館健一(2009), 「ことばの「学び」を育てるプロジェクト — 高等教育における語学教員による互恵的コミュニティ形成の試み」, 『コンピュータ&エデュケーション』, vol.27, Council for Improvement of Education through Computers.

藤田知子(2011-2012), 「多言語コミュニケーションセンター・事始め: 2008-2010 年度」, 『国際社会研究』, vol. 2, 神田外語大学.

吉見俊哉(2011), 『大学とは何か』, 岩波新書.

吉見俊哉・安達淳・竹内比呂也・羽田功・田村俊作(2012), 「メディアの変化の中で大学図書館はどこへ向かうか」, 『三田評論』, 2012年6月号(特集・大学図書館のこれから).

ランシエール, J.(2011), 『無知の教師—知性の解放について』, 法政大学出版局.

レイヴ, J. & ウェンガー, E. (1993), 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』, 産業図書.

神田外語大学多言語コミュニケーションセンター (MULC) / セルフアクセス・ラーニングセンター (SALC)

<http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/seven/mulc.html> / <http://eliscalc.org>

慶應義塾大学外国語教育研究センター プルリリンガル・ラウンジ

<http://www.flang.keio.ac.jp/modules/tinyd0/index.php?id=249>

慶應義塾大学日吉キャンパス 日吉コミュニケーション・ラウンジ

<http://www.hc.keio.ac.jp/ja/facilities/campuslife/hcl.html>

慶應義塾大学 Plurilingual Lounge Organization (PLURIO) /

<http://plurio.hotcom-web.com/wordpress/>

「留学生と商店街 学生が結ぶ日吉」(日本経済新聞 2012年8月6日付朝刊記事)

<http://www.nikkei.com/article/DGXDZO44588250V00C12A8TCP000/>

慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター マルチメディア・マルチリンガル・スペース(MMLS)

http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/general/room_2.html

慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター「メディアセンターフレンズ3名の提案

http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/about/friends_proposals.html